

英語不安の乗り切り方

～英語での授業を目指して～

PROFILE

〈監修〉

影浦 攻

かげうら おさむ

(鹿児島純心女子大学副学長・教授／宮崎大学名誉教授)

広島大学卒業。教諭(鹿児島中央高校、広島大学附属中・高校、鶴丸高校)の後、鹿児島県教育庁指導主事、文部省(当時)教科調査官、宮崎大学教授(その間、附属中学校長、附属小学校長を歴任)、鹿児島純心女子大学国際人間学部長を経て現職。

『小学生のえいご Book1～3』(啓林館)、『新しい時代の小学校英語指導の原則』(明治図書)、『改訂英語科新授業の実践モデル20』(明治図書)、『小学校教師の基本教室英語96選』(明治図書)、他多数。

〈連載第5回執筆〉

町田 智久

まちだ ともひさ

(国際教養大学専門職大学院准教授)

1970年東京都生まれ。米国イリノイ大学大学院修士課程修了(英語教授法専攻)。同博士課程修了(初等教育専攻)。東京都の公立中学校に英語教諭として12年勤務後、退職し留学。国際教養大学EAPプログラム講師を経て現職。

『Teacher Education and Professional Development in TESOL』(第11章:Routledge)、『Keirinkan Science Readers』(啓林館)など。

① はじめに

2020年の小学校英語教科化に向けて、各自治体や学校では急ピッチで準備が行われています。私の住む秋田県でも、小学校高学年の授業時間数(70単位時間)をどのように確保するのか、また教員の研修をどのように行うのかなど、地元の先生方の間で話題になっています。その中でも特に、先生方の英語に対する不安が話題になります。小学校の多くの先生方が、英語を長年使っていなかったこともあり、英語を話すことに苦手意識を持っています。昨年、秋田県内で実施した調査では82.5%の小学校教員が、自身の英語能力に対して不安を持っていました。「自分の使う英語の言い方や発音が正しいのか不安です」や、「いざ会話となると、単語が思い出せずに言葉に詰まってしまう」など、英語の使用に関して苦労されているようでした。また、2020年からの英語の授業に向けても、どの程度の割合で英語を話さなければならないのか、日本語を使って指導しても

よいのか疑問に思っている先生方も非常に多いです。

この先生方の問いに対して、私は「できる限り英語を使って授業しましょう」と常々言っています。しばしば“オール・イングリッシュ”などという言われ方もしますが、小学校の先生方が英語で英語を教えることを目指すのが理想だと思います。なぜそうすべきなのか本稿の中で詳しく説明していきます。

② 授業を英語で行う理由

まず、「英語によるインプットの重要性」です。多くの研究者(e.g., Nunan, 2011)が、外国語の習得には十分なインプットが必要だと主張しています。わかり易く言えば、英語のシャワーを十分に浴びることで、子どもたちは英語の音や表現を学んでいき、英語力を身につけるということです。すると、「もっとALTを活用しよう」という話になりがちですが、ALTを活用するだけでなく、担任も英語を話せばインプット量は倍増します。また、担任が1人で英語の授業を指導することもありますから、より

多くのインプットを子どもたちに与えるためにも、担任の英語による発話は欠かせません。

次に「日本の英語学習環境」です。アメリカやイギリスで英語を学ぶのとは違い、日本で英語を使うのは教室の中だけ、それも英語の授業時間のみです。それ以外は基本的に私たちは日本語を使います。このように“外国語としての英語”の学習環境では、英語に触れる機会が限られます。インプットの重要性も考えると、限られた英語の学習環境で子どもたちが英語に触れる機会を増やすには、担任が英語を話すことが非常に重要です。

第三番目には、「中学校との連携・接続」が挙げられます。次期学習指導要領に向けて文部科学省(2016)は、中学校英語の「授業を英語で行うことを基本とする」としています。つまり、今後は中学校の英語の授業は原則英語で行われることになります。中学校の次期学習指導要領の先行実施が、小学校と同じ2018年度からですので、今後英語で授業をする中学校の先生方が全国で増えると考えられます。その際に、小学校英語の授業が日本語で指導されていると、子どもたちの学習がうまく中学校に接続していかないのではないかと危惧されます。英語の学習における“中1ギャップ”が起きてしまうかもしれません。英語指導における中学校とのスムーズな連携・接続を考えると、小学校においても「できる限り英語を使って指導」することが求められます。

さらに、「World Englishes(世界の英語)」という考え方が挙げられます。一般に、英語はアメリカやイギリスの言葉というイメージが強いですが、同時にグローバル社会での共通言語にもなっています。英語を母語とする人々が3.7億人なのに対して、英語を話す人々は世界中で15億人といわれています(Statista,2017)。その“共通言語としての英語”では、多少訛りのある英語(例えば、日本語訛りの英語)を使用したとしても、適切なコミュニケーションができるのであれば何の問題もありません。

むしろ訛りのある英語を話すことも、ある種の個性と肯定的に捉えようという考え方もあります(鳥飼, 2011)。実際にテレビ中継などでは、英語を母語としない様々な国の人々が、多少訛りのある英語を使って、堂々とインタビューに答えている場面などを目にする機会があります。地元の小学校で、「私は秋田訛りの英語で頑張っています」と冗談交じりに明るく言ってくれる先生を知っていますが、とても素晴らしいと思います。ネイティブ・スピーカーの英語とは違うかもしれませんが、自信を持って英語を話すことが、担任教師には何よりも求められます。

そして最後に、「英語を使うロールモデル(模範となる人物)」を子どもたちに示す必要があります。これまでの英語教育は、ALTなどのネイティブ・スピーカーが最良の先生だという考え方がありました(Braine,2010)。日本の小学校でも「なるべくALTの先生の発音を子どもたちに聞かせたい」という理由で、あまり積極的に授業に参加しない先生も残念ながらいます。しかし、どんなに頑張っても子どもたちはネイティブ・スピーカーにはなりません。子どもたちが将来なるのは、英語が話せるノンネイティブ・スピーカーです。そのためにも、英語を外国語として習得し、コミュニケーションの道具として英語を使うロールモデルが必要なのです。私は、担任がそのロールモデルであるべきだと考えています。担任がALTと対話する例を示したり、実際に子どもたちに英語で話しかけたりする様子を見せることで、子どもたちは「ああやって、英語を使うのか」とか「こういう風に話せばいいんだ」など、自分たちがどうやって英語を使うのかを学ぶのです。英語を使うノンネイティブの模範を示すことができる担任は、子どもたちのスーパーヒーローです。その意味でも、担任は英語で授業をするべきだと思います。

③ より伝わりやすく発音するには

そうは言っても、やはり英語を話すこと、特に英語の発

音に不安を抱えている先生方は多いです。ある小学校の先生が、次のように話していました。「What do you eat for breakfast?と聞かれた時に“ライス”と答えようとしても、正しくrice(米)と言えずに、誤ってlice(シラミ)と言ったら大変です。」確かに、2つの語の意味は大きく違います。しかし、発音に必要以上に神経質になる必要はありません。実際の会話では前後の脈絡がありますし、常識も働きます。誰も「シラミ」を食べるとは思いません。では、カタカナ英語で全て大丈夫かといえば、それも違います。正しく発音できないとしても、その音を出すための正しい調音方法(例えば、舌の位置や口の形など)は意識する必要があります。そして英語を発音する際には、イントネーション、ストレス、リズムの3つを意識する必要があります。この3つに注意を向けることで、英語が非常に相手に伝わり易くなります。

まず、イントネーションについてです。基本的には3種類(「下降」「上昇」「下降・上昇」)ありますが、小学校の先生方が特に注意すべきは、「下降」と「上昇」の2種類です。子どもたちへの指示文は、下降イントネーションとなります(例えば、Please pick up your pencil. ↘やLet's sing a song. ↘など)。それに対して質問文は上昇イントネーションになります(例えば、Do you understand? ↗やAre you ready? ↗など)。しかし、同じ質問文でも疑問詞(what, who, howなど)で始まる質問文は、下降イントネーションになります(例えば、What do you see? ↘やWho's this? ↘など)。これらはしばしば間違えて発音されているので、注意してください。

次にストレスについてです。英語の発音に関して「ストレス(stress)」という場合は、強く読むことを意味します。「強く読む」とは、大きい声を出すことではなく、息を一気に吐きながらはっきり読むということです。英語は日本語と違い、音の強弱を使って意味の違いを表す(例えば、desert: 砂漠、desert: 見捨てる)ため、ストレスを

どこに置くかは非常に重要です。1つの単語の中だけでなく、文レベルでもストレスは存在します。次の会話を見てください。

A: Do you need any help? (↗)

B: Maybe you could help me finish these graphs. (↘)

(出典: Hann&Dickerson, 1999)

下線の入っている太字にストレスが置かれます。基本的にストレスを伴って読む単語は、名詞や動詞などのコミュニケーションを行う上で重要な意味を持つ語で、助動詞や代名詞などにはストレスは置かれません。それらメッセージ性の強い単語にストレスを置くことで、より相手に意味が伝わり易くなります。

最後にリズムについてです。英語ではストレスを置く単語が、同じ間隔で現れて一定のリズムを刻みます。このリズムに乗って英語を話すことでより伝わり易くなります。よく小学校の外国語活動の授業で、「チャンツ」が使われています。これはストレスの置かれる単語を手をたたきながら強く読み、英語のリズムを身に付ける活動です。手をたたけば何でもよいというわけではありません。上で紹介した会話文を、下線を引いた太字を読む時に手をたたき、一定のリズムを保ちながら読んでください。さらに、イントネーションやストレスも意識してみてください。以前よりもずっと伝わり易くなるはずです。英語では1つの文の中でも、ストレスを伴ってゆっくりはっきりと読む語と、ストレスを置かず素早く読む語を区別しながら発音することが大切です。

④ 英語不安の軽減に向けて

最後は、いよいよ不安を軽減する方法についてです。研究者のHorwitz(1996)は「自らの外国語不安を自覚した上で、自身の外国語が完璧でなくても良しとし、さらにこれまでの自分の外国語における努力を認めること」

が大切だと、アドバイスしています。私たち日本人にとって英語は外国語です。何もネイティブ・スピーカーのように英語を使う必要はないのです。たとえ先生であっても、その外国語の学習者であり続けることには変わりません。それならば、英語が上手く出てこなくても、完璧でなくても当然です。さらに、その外国語を使っの指導は、大変な努力を伴います。先生自身も、子どもたちと同じように英語の学習者なのだという気持ちで指導すれば、心理的な負担は大分軽減されるはずです。

加えて、次の3つ(成功体験、強みを生かす、英語表現を身に付ける)を実行してください。まずは、英語での成功体験です。これは実際に英語でのコミュニケーションを行い、「自分の英語が通じた」「相手の言っている英語がわかった」という体験をすることです。大人であっても、成功体験は自信につながります。そのためにも、学校に来るALTにとにかく英語で話しかけてください。週末はどんな予定があるか、小学校での授業は楽しいかなど、話題は何でも構いません。積極的に一步踏み出して、コミュニケーションをしてください。その中で、英語での成功体験を重ねることがとても重要です。

次に、先生自身の強みを英語の授業に生かすことです。小学校の先生方も、専門の教科や分野を持っています。また、趣味などもあると思います。それらの知識や技能を英語の授業に取り入れることで、英語を自分のフィールドで指導できるようになります。音楽が得意な先生が毎時間英語の歌を子どもたちと一緒に歌ったり、社会が得意な先生が世界の国々を毎回英語で説明したりしている例もあります。強みを生かして授業を組み立てることで、英語に対する不安も軽減されます。

最後に、やはり基本的な英語表現を身に付けることは必要です。昨年、私は小学校で担任の先生と一緒に1年間授業をしました。その先生は通勤途中の車の中で毎日英語のCDを聞いていました。流れてくる英語を口ずさみながら、車内で練習したそうです。その先生が「英語で

授業するというハードルは、越えてみると思ったほど高くなかった」と言っていました。その先生は、決して英語が得意だったわけではありません。ただ、地道な努力を積み重ねたからこそ、ハードルは高くなかったと言えたのだと思います。授業で使う英語の表現は、それほど多くはありません。少しずつでも表現を身に付けていってください。そうすることで、不安は大きく軽減されるはずです。

まとめになりますが、教科としての小学校英語が成功するかどうかの鍵は、担任の先生方がどのように取り組むかにかかっています。子どもたちの英語学習のロールモデルとなるように、できる限り英語で授業に取り組んでください。不安を抱えている先生は、少数派ではありません。大部分の先生方が不安を持っています。その不安といかに向き合い、軽減する努力をしていくかが重要です。是非、1人でも多くの先生方に、「ハードルは高くなかった」と感じていただきたいと思っています。

引用・参考文献

- ・文部科学省(2016)『今後の英語教育の改善・充実方策について報告』
- ・Nunan,D.(2011) *Teaching English to young learners*. Anaheim,CA: Anaheim University Press.
- ・Statista.(2017) *The most spoken languages worldwide*. Retrieved from <https://www.statista.com/statistics/266808/the-most-spoken-languages-worldwide/>
- ・鳥飼玖美子(2011)『国際共通語としての英語』 講談社
- ・Braine,G.(2010) *Nonnative speaker English teachers*. New York,NY:Routledge.
- ・Hann,L.D.,& Dickerson,W.B.(1999) *Speech craft*. Ann Arbor,MI: The University of Michigan Press.
- ・Horwitz,E.K.(1996) Even teachers get the blues. *Foreign Language Annals*,29,365-372.